
こんな感じで 星野商店～時給780円～

猫間 三礼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな感じで 星野商店へ時給780円へ

【Zコード】

N4180N

【作者名】

猫間 三礼

【あらすじ】

数ヶ月前にリストラされ

引きこもりながら好き勝手にやっていた【小塚 義人】「ジカヨシト 18歳。

おかげで貯金を使いはたし、いよいよ生活できなくなつた彼は再就職をする事に。

しかしこの不況で再就職は困難を極めた…

そんな時見つけた小さなバイト募集記事。

最後の望みを託して電話をしてみるが…

第1話（前書き）

処女作です。

というか…俺なんかが何故書こうとしたのかもわかりませんw
作者は本当に素人中の素人です。

このお話は【小塚義人】君が個性的すぎる仲間に囮まれながら、いろいろ頑張つてみるお話ですよね？（笑）
作者的にはそうしたいです（・・・）

まずは、小塚君に就職してもらわないと…

第1話

第1話「スタートダッシュは転ぶと取り返しがつかないから、慎重に走りだそう」

お金持ちって訳じやないが貧乏でもない。

中学卒業と同時に就職して3年、製造関係の工場に勤めながら20数万の給料をもらいつつ、それなりに楽しく生活していた。

そして、そんな日々が続くと思つていきました。

2ヶ月前までは…

「……金が、ねえ」

6畳1間トイレ、キッチン、風呂付きの、何処にでもあるアパートの1室で携帯電話を操作しながら【小塚 義人】は呟いた。

「んがあ～金がねえ～、今月の家賃と光熱費を払ったのはいいけど、

総資産1万400円で…」

計算に使つていた携帯を布団に放り投げる。

「！」のままじや来月の家賃は滞納か？いや収入が無い今、この先破綻するのは目に見えてる…だあ！これも不況のせいだ…！不況の大波を回避出来なかつた会社がいけないんだあ～

そう、小塚義人は現在無職である。

3ヶ月前、普段どおりに出社した俺は、朝礼で工場長の話を聞いていた。

しかし工場長の話の内容は普段どおりとはかけはなれた非常に世知辛い内容だった。

「え〜、皆さんに大切な話があります。申し訳ないのですが…来月月末をもって当工場を…閉鎖とします。」

いきなり発表された「オマエラ来月から二ート…」宣伝により困惑する社員、パート一同。

しかし工場長は尚も話を続ける。

「閉鎖と言つても、倒産ではありません。同じ県内にある当社の工場と合併する事になります、しかし、現在の勤務地よりかなり離れてしまつ為、通勤できないパートの方は辞職してもらうしか…それと社員に関しては多少の人員削減を行います、後日面談等がありますので了承しておいてください」

そして、工場長の言つた面談等が終わり、晴れて俺は二ートとなりました

まさか【多少の人員削減】に俺が含まれるとは…

しかし久しぶりに自由となつた俺は仕事辞めた後、多少あつた貯金を使い。

やりたかつたゲーム

読みたかつたマンガ

見たかつたアニメ

見つめたかつたフィギュア

をとことん買い、堪能し、非常に有意義な時間を過ごしていた。
結果、今の仕事無し、金も無し、未来無し、の豪華絶望三昧を送る
羽目になってしまったのだ。

うむ…これぞ自業自得だな！

「にしても…こつまでも愚痴ってても仕方ない、職を探すか。」

いくら不況といつても全く仕事が無い訳ではない。
職種を選らばなければ、それなりに就職はあるもんだ。

「となれば、とりあえずゲットワー君（無料就職雑誌）でも貰いに行くか、朝飯もまだしついでに買つてこよう。」

着ていた黒のスウェットを脱ぎ、部屋に脱ぎ捨ててあつたジーンズ
とシンプルな黒のロコンテを着る。

ものの5分で支度を终え、近くのコンビニへ向かった。

そして…帰宅。

家を出てわずか15分程で帰宅、実に無駄の無い行動だ。

決して、2ヶ月間引きこもつてたから他人の目が怖くなつたとか。
外に出るとなんかソワソワするとか…そんなんじゃないんだかねつ
／＼／

「……うん……やつさと就職しないと俺、手遅れになるな……おつ！？朝アニメ「キラリ魔法戦士 轟 嶺十郎」の時間が過ぎてるじゃないか！！」

ポチッと近くにあつたリモコンを操作してテレビをつけた。

『世界平和？それがどうした…ワシが目指すのは、この世全ての平和だ。例え世界が平和にならうとも、お主が笑えない世界なんぞいらぬわあ！！だからワシはお主も救うぞ！？のお魔王…ワシはお主の笑顔が見てみたい！いや！最後の喧嘩をしようではないかあ！！轟嶺十郎推して参る！…』

持っていた魔法ステッキを投げ捨て、鍛え抜かれた筋肉と胸に抱いた信念を武器に殴りかかる轟嶺十郎！

と、そこで【次回予告…】が始まった。

「ああああ～最終回前の準神回を半分見逃したあ～最悪だあ…今までかかさず見てたのに…クソッ！どこかで配信してないのか！？公式サイトは…？」

俺は部屋の片隅にあるテーブルの上に置かれたパソコンを開く。そして開くと同時に勢いよく

「そ、うじやねえだろ俺えええ…！」

ガシャーン…！

パソコンを真横になぎ払った。

「はあはあ…危ねえ、またあっちの世界（アニメ界）に連れてかかるところだつたぜ…轟巣十郎恐るべし…」

ちなみに【キラリ魔法戦士 轟巣十郎】とは、

ラブリーな「スチューム」に身を包んだ59歳身長193センチ体重120キロ、角刈りで筋骨隆々の魔法戦士、轟巣十郎が全てを救う為に拳ひとつで敵と戦い更正させていくアニメ番組である。

ゼひじ家族揃つてお楽しみください

「とりあえず…まずは職探しだ！自分で思つてた以上に俺は壊れていた…一刻も早く社会復帰しなければ…！」

そつとわかれば、やる事は一つ！
マシンガン・ワーク・テレフォンだ！

つまり…良さそうな職場に片つ端から電話をするだけ。
ゲットワー船をめぐりながら条件の良い職場を探す事、数ページ。

「まあは…」「イツー君に決めた！」

【UD製造工場、簡単な仕事です、週休2日、月給25万以上、残業手当あり】

「素晴らしい！前と同じ工場勤務だ、作業は違うが雰囲気的に慣れるのも早そうだな」

プルルル…プルルル…プルッ

「もしもしー！ゲットワー君を見てお電話をせていただいたんですが、え？はい、ああ…はい、はいわかりました。失礼致します。」

… プツッ

「既に採用が決まっているだと！？バカな！ゲットワー君の発売日は一昨日、それからまだ2日しかたっていないんだぞ？恐るべし就職難民…」

好条件の職は言わば【肉】

そして、就職難民は【ピラニア】

大量のピラニアが入った水槽に肉を入れたらどうなるか…

我先にと食いついて、肉と言つ名の職は一瞬で消えてしまつ

「ゲットワー君が発売されて2日… 時既に遅しか？いや諦めるのはまだ早い！俺のマシンガンの性能をナメるなよ！！」

プルルル… プルルル…

「もしもしー！ゲットワー君を見てお電話をせて…あつ…はい…はい…失礼します」

プルルル… プルル…

「もしもおしー！ゲットワー君をおー… わかりました…はい。」

プルルル… プルル… プルル…

「はい残念！！」「一ルで出なかつたから切れります！！俺といふ優秀な人材を逃した事を悔やむがいい！！」

プルルル…プルルル…プルルル…プルルル…プルルル…

「電話でよ…（泣）」

……2時間後……

「はあはあ…はあ…ま、まさか全滅とは…内定しているのは仕方ないが、中卒つてのがここまで影響するとは…」

実際、仕事はあつた

しかし、どの会社も正社員は高卒以上だった、確かに最低人員で効率よく仕事をするには優秀な人材が必要だが…

学歴だけが全てじゃないだろ？】

「これだけ探して無いと、いよいよ切羽つまつてきたなあ……ん？」

なかば諦めかけながら、ゲットワー君をめぐつて「あるページの片隅、片隅と言つか…欄外に

【星野商店、バイト募集、TEL後面接】と小さく書かれていた。

「バイトかあ～出来れば正社員が良いんだけど…このまま無収入はヤバいよなあ…はあ…仕方ない、職を選んでたら就職なんて出来ないし、どこか正社員で働けるまでの繋ぎつて事ならアリか」

実際、何でもいいから働かないと住む場所すらなくなるからな。
早速電話してみよう。

プルルル… プルルル…

「お電話ありがとうございます。星野商店です。」

数回のコールの後、携帯から聞こえたのは、柔らかく澄んだ優しい声
無駄な例えが必要ないくらい、人を安心させる優しい声だった。

「あのっ…ゲットワー君を見てお電話させていただいたんですが、
バイトの募集はまだ受け付けてますか？」

「ありがとうございます、はい。バイト募集の件ですね、少々お待
ちください。」

保留ボタンを押したんだろう、携帯から軽快なリズムの音楽が聞こ
えてきた。

正直、商店と言つくらいだからお爺さんかお婆さん、もしくは中年
の方が電話に出ると思ったが、今の声は間違いなく若い、20代：
いや、もっと下かな？

ガチャ

「お電話かわりました、店長の星野です。」

次に携帯から聞こえたのは予想してたような中年男性の声だった。

「あの、バイトの件でお電話させていただいたんですけど…」

「よく見つけたねえ～、あんな片隅の落書きみたいな募集を」

「店長自分で言ひたやつたよ…」

「ん～バイトかあ～君いくつ?」

「えと、18歳です。」

「18歳かあ～学生さんかな?」

「いえ、中学を卒業してから3ヶ月前まで工場で働いてました。今は…その、フリーターです」

「どうせ後でバレるんだ、今のうちに中々いつて言つても問題無いだろう。」

「なるほどねえ…」

「またダメか?」

「んじゃ今から面接これるかな?場所はわかる?」

「え?今から?場所はなんとなくわかりますけど…今ですか?」

「もう今から、場所がわからなくなったりまた電話してくれれば案内するから～んじゃまた後でね～」

「あつはいわかりました、それでは失礼しますー」

プツッ…

「ふう…俺は携帯を置いて一息……つけねえ…！」

「やべえ…今から？俺ずっと風呂入ってねえ…急がないと…！」

予想外の展開に慌てて支度を開始、風呂場がめちゃくちゃになるくらい荒々しくシャワーを浴びたかいがあつてか、20分程で支度は終わった。

星野商店は自宅から15分程にある【初音台商店街】の中にある。大きな商店街ではないが、店の数もそれなりで、地元の主婦や学生には人気のある商店街だ。

「えーっと…星野、星野…あつた…！」

商店街に入つてすぐに星野商店はあった。
木造住宅で1階が店舗、2階が自宅、なんとなく昭和のかおりがする落ち着く感じのお店だ。

「すいませ～ん…先ほど電話させていただいた者ですけど…」

「すいませ～ん…！」

何度も呼ぶと奥のドアから、ぱちゅりとした優しい感じの中年男性がてきた。

「おっ？ 来たねえ～？はじめまして、星野商店店長の星野です。」

「はじめまして、小塙義人です。」

「小塙君ね、よしー早速面接をしようつーつこいくてー。」

そう言つて星野店長は出てきたドアに戻つて行く。

つこいくてドアの先はかなり広い事務所になつていた
まあそのほとんどは在庫商品が置かれていて、事務所兼倉庫のよう
な感じだ。

星野店長に案内されるまま机と椅子があるスペースにつこいくと。

「よいしょつと…ふう～小塙君も座つて、それじゃ面接を始めます。

」

「あつはい、お願ひします」

「面接の質問…いや、採用の条件は一つ。何も聞かずに就職できる
か！！」

「はあ！？え？どう言つ意味ですか？」

「ん～？言葉通りさ、事前に勤務時間、給料その他もろもろ何も聞
かずにそれでも働きたいなら雇つてあげる。」

「な、なんすかそれ！？事前に給料すらわからず働くとか無理で
すよーてかそれ法律的にどうなんですか！？」

「ん～嫌ならしいんだよ？ただほら…ウチに電話してきたくらいだ

から、小塚君も大変なんじゃないの？」

「うう、それはまあ…そうですがこの条件は…」

「えじやーの話じは無じや…」

「あああーひよつと待つてください…少し考える時間を…」

確かに四の五の言つている場合じゃないのは事実だ。始めてもいいのに不安になつても仕方ない…！

なら…行け！恐れるな！このままでは待つのは破綻だけだ！進め！走れ！ゴー！ゴー！ゴオオオウ…！…

「んうううがああ…！わかりました…！…やります…！…やりしてください…！…雇つてください…！」

「…言つた俺ええ…！」

「…ニヤッ…本当にいいんだね？小塚君？今なら戻れるけど…」

「構いません！俺は引きこもり生活を終わらせ、新たなスタートをきるんです…！」

「よし！小塚君採用！合格…おめでとう…！それでは勤務条件を発表しよー！」

- 1、週6日以上勤務
- 2、休みは不定期
- 3、1年に1回契約更改（クビもあるよ）
- 4、時給780円からスタート

「地味にシビアでハードー？でも稼げそうだし…わかりました！！
それで構いません、これからようしへお願ひします！」

「ひがひがよろしく、小塙君！」

こうして、俺は星野商店に勤務する事になったが

この時、何故もう少し冷静かつ慎重な判断ができなかつたのか…と
後悔するのも少し先の話。

第一話（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございますーーー！

「個性的すぎる仲間」

登場しませんでしたね～

とつあえず、小塚君は就職出来たよつです。
次回は、個性的すぎる仲間を出してこきます。

多分、あいつ…

五更（．．．）…

第2話（前書き）

今回は弓やじもり小説になってしまいました…何故に？

第2話

「レベツカ！ プルシエンコー！…」

「違つ！…もつとお腹から声だしてみよつ！…」

「レベツカ！ プルシエンコオ！…！」

「いいよーーそのまま憂いと悲しみを込めて言つてみよつ！…」

「レヴェツカア～プリュシエンクオオン！…」

「いいよ、いいよお～！？小塚君こいよお～」

…俺 何してんだ…

第2話

【魔法のあいさつレベツカ！ プルシエンコー！…】

「んじや、勤務条件も伝えたし…何か質問とかあるかな？」

無事に採用された俺に星野店長が尋ねてくる。

週6日以上勤務
休みは不定期

年に1回契約更改（クビもあるよ）

時給780円

以上4つがここ【星野商店】で働く為の条件だ。

「んー地味にハードでシビアですけど…しっかりと収入を得られそうなんで問題ないです。むしろ、そんなに働かせてもらえてありがたいくらいですよ」

「そうか～それなら良かったよ、こちらとしても若い男の子が欲しかったところでねえ～商店つていっても棚卸しや商品の補充は意外に力仕事なんだよ～」

「力仕事なら任せてください。体力には自信あるんで！今は（引きこもり生活で）…多少衰えてますが…すぐに元通りになりますから…！」

「あははーうん、頼もしいね！期待してるよ小塙君ー…？」

「はいっ…！」

「うん！いろいろと驚いた事もあったけど、勤務条件もそれなりだし、店長は優しそうだし…頑張れそうだなー！」

…ん？ そういえば…

「星野店長、少し聞きたいんですが…さつきからお店に誰もいませんよね？ 大丈夫なんですか？」

「え、ああ～大丈夫大丈夫！お昼前までは、あまりお密さんこないから～それにお店のドア開けると呼び鈴が鳴るよくなつてゐるからねえ～」

そうだつたんだ…確かに、星野商店がある初音商店街は主に、主婦や学生さんが利用するからな。

平日の中は暇でもおかしくないか。

「それにお昼のピーク時までは、ゆずちゃんも帰つてくる」

「ん？ ゆずちゃん？」

「ああ～ゆずちゃんて言つのは僕の娘。今は用事で出掛けてるからいないけど…確か小塚君からの電話に出たはずだけど？」

「あつ～？あの声が綺麗な女の人つて娘さんだつたんですか！？いや…正直、商店つてイメージとはかけはなれた声だつたんで、少し焦りましたよ」

「あはは、ゆずちゃんは声もいいけど外見も美人なんだぞ～それに家事、炊事、洗濯、全部得意でいつお嫁に出しても恥ずかしくない自慢の娘だよ～」

おお～あの綺麗な声から想像するに、かなりの美人さんだとは思つていたが…

そこまで完璧だと会つのが非常に楽しみだ…！

一緒に仕事してれば仲良くもなれるかもだし
これはアレか？いわゆる恋愛フラグですかあ？
そんなあ～いきなりボーナス支給だなんてえ～

よつー！店長日本ーーー

なんかもお、抑えられない感情がはち切れんばかりに膨れ上がる予感だぜーーー

「あつ……言つておくけどーーいつ、お嫁さんに出しても恥ずかしくないけど……」

店長がそつ言つた瞬間…世界が…凍つた…
いや…これは比喩だ

しかし、目の前の人物は先ほどまでの優しい店長とは思えない程の冷たく重い威圧感を放つている…

「嫁に出すつもつはない…手だしたら…消す…いいな？」

ヒイイイイーーまさかの死亡フラグウーー？

「ハ、ハイツーーもちろんですーー私、小塚義人は仕事以外には目もくれず馬車馬の如く働かせていただく事をここに宣言致しますーー！」

「

ヤベエーー何この人ーー

なんか纏つてるよ絶対ーー

暗黒鬪氣的な、なんかほらあの皆わかるかなあーーアレだよほらーー

！怖ええよおおおーー

例えが浮かばねえくらい怖ええつてええ（泣）

「あつはつはーー冗談だよ冗談 小塚君は面白ーなあー！ゆずぢやんはーー6歳、小塚君とは年も近いし 仲良くしてあげてくださいーー フツと先ほどまでの冷たい空気が和らいだ。

いや……絶対冗談じゃなかつたぞ……うん……
ゆずちゃんには悪いが、仕事上最低限の付き合い以外はしないよう
にしておけ……

「めで、ゆずちゃん、俺は命が何より大切なヘタレ男なんだ…

俺はパラレルワールドでは嫁になつているかもしれないまだ見ぬ、
ゆずちゃんに謝つた。

「わあー！冗談はもう終わりにしちゃ。どうだらう、小塚君。時
間があるんなら挨拶の練習とか簡単なレジ作業の練習してみないか
い？」

「え？ 今からですか？ まあ時間はありますけど、むしろ暇ですけど
……」

「もちろん、給料はだすよ～～～これも立派な仕事だしね～それに練
習中にもゆずちゃんも帰つてくるだらうし、顔合わせは早い方がなに
かといこだらう～～～」

給料だしてくれるのか！？

だつたら少しでも稼ぎたい俺としてはありがたい。

それに接客業に関しては素人どころか初体験だし、本番前に練習で
きるならじつとおかないと不安だ。

てか……

ゆずちゃん見てみたい！！

恋愛する勇気はないがな……見るだけならタダだ！！

「あつ、はい。星野店長が良いなら練習をせていただけるとありがたいです。その、接客業は初めてなんで基本的な事すらわからないんですよ……」

「よし、そうと決まれば……よしょっと、確かここに……ん~…おつ? あつたあつた~ハイ小塚君これ着けて~」

立ち上がった店長は近くにあつた段ボールから一着のエプロンを取りだし俺に手渡してきた。

……え?

「あの……星野店長……これって……」

「うん~星野商店の制服だよ? どうだい、カツコいいだろ~! ? 娘が『デザインしてくれたんだ カツコいいよね? ねつ?』

「えつと……その、なんと言つか……」

いや……無い……正直コレは無い……

手渡されたエプロンは

ベースは濃いピンクで、所々に緑、黄、青の星がプリントされていて、エプロンの中央には縦に大きく金色で【星野商店ドット混む】の文字が書いてある。

これは……流石に……

「いやあ～何と書つか…正直カツ「わ」」

「ブウォン！！ オーラを纏つた音

「…カツ「コいい…よな！？あん？まさか、カツ「悪い」とでも言いたいのか！？」

「ヒイイイイ！！まだでたあ～

めつちや怖い！！なまら怖い！！

ああああ…ダメだ…無理…もお心中でも騒げないもん…怖いもん…過保護だもん…時代が世紀末なら霸者になれるもん…死後は英靈となつて何処かにいるであろう魔術師さんに呪喰されそうだもん…ああ…イ…ヤたん可愛いなあ…

「つとー？逃避してる場合じやない！！

「カツ「コいいでええす！！もおめつちやカツ「コいいです！！」この斬新な色使い！！時代を先取りし過ぎて一周してむしろ遅れてしまつたような「デザイン」！そして何より中央に書かれた言葉が深い！！深イイでええす！！」

「…………でしょ～？カツ「コいいよね～～ゆずちゃんはデザイナーの才能もあるんだよ～本当にもお最高の娘を持つて僕は幸せだよ～～

「アハハハハ…ハハツ…」

「どうやら機嫌は治つたみたいだな。

にしても… ゆずちゃん…

完璧だと思ったけど、美的センスは壊滅的だな…

「 わあ…遠慮せずに着て！」りん、 着終わったら練習を始めよ！…！」

「うわあ…店長めっちゃ盛り上がってるよ…」

はあ仕方ない、これも仕事だ、それに制服なら従業員は全員着てるはずだし。

赤信号踏で渡ればなんとやらだ。

「えっと、どうですかね？エプロンなんて滅多に着けないんで…」「れであつてます？」

「Gっ！…完璧！…パーフェクト！…いやあ～小塚君！似合つてるよ～実際に似合つてる…！」

いや…なんも嬉しくねえ。

「それじゃー早速練習を始めよつか！？まずは、挨拶の練習から。挨拶は接客業の基本、ちゃんと挨拶が出来ないとスタートラインにすら立てないからしつかり練習するよ！」

「ハイツ…！」

ふう、やつと練習スタートか。
よしー元気だしてやりますか！…

「それじゃ、まずは僕に続いて大きな声で挨拶してみよーーーあつ、
その時に必ず儀式をするのを忘れないようにー！」

「わかりましたーお願いしますー！」

「それじゃ、いくよ～？」

『レベッカ・ブルションローー』

「…………？」

「おや～～うしたんだい？緊張しなくていいよ～店には僕しかいな
いんだし、大きな声で恥ずかしがらぎに言つてみよつ！？せ～の」

『レベッカ・ブルションローー』

「…………」

「どう～して言わないので小塚君～。恥ずかしいかい？でもね大きな
挨拶は基本だよ？」これが出来ないとこのまま雇用し続けるのは厳しくなつてくるよ？」

「…………いやいや～星野店長～さつきから当たり前に言つてますけ
ど～なんすかその、レベッカ・ブルションローーってやつは～～普
通、接客業の挨拶と言えば、いらっしゃいませ～から～じょう！？
違いますか？いいや違いません～～いらっしゃいませが基本です！
～！」

「甘い！小塚君甘いよ～。確かに、接客業と言えば、いらっしゃい
ませが基本です。しかし、この不況の中他店との生存競争を勝ち抜
くには基本だけではダメなのです～～基本をベースに独自に進化させ、それを新たな基本する、そつやつて他店との差別化をはかり！
～」の厳しい不況を乗り切る～～その為に、愛しの娘が考え出した
のが【進化系挨拶】レベッカ・ブルションローーなんです～～」

「また娘か！－ぬずちゃんどうした！－【進化系挨拶】って完全におかしいでしょう！－てかレベッカ！ブルシェンコ－－は、いらっしゃいませの進化系なんすか！？どんな突然変異でそうなったんですか！？俺は、いらっしゃいませから、レベッカ！ブルシェンコ！－に至るまでの進化の過程が知りたいです！－何故そうなったんすか！－」

「ギラツ…ああん！？ウチの娘が考えた商売戦略になんか文句でもあるんですかねえ？無いよねえ？もし…文句が有る、だなんて言うような口があつたら…そんな口、必要ねえから縫い付けてやるのが親切心だと思わねえかあ？」

…………（泣）

もおやだあこの人おお！－
どんどんヒートアップしてくるもおん！－無制限で威圧感が増して
るもおん！－

SF枠とか、バトル枠で登場するべきだもん、コメディに向いてないもおん！－
てか…うわっ見てる…めっちゃ見てるううー！－
俺はこの人のキャラが全然見えてこないってのに！－

「コ・ヅ・カ・く～ん…返事が無いって事は…文句があるって事でいいのかなあ？いいのかい？いいって事でいいね！？」

「良くないでえええすう！－文句とかそんな！無いでえす（泣）あ
るわけがないんでえす！－ただ、ほら僕みたいな凡人には【才色兼
備】【良妻賢母】【正義超人】【超電磁砲】【馬耳東風】（パニ
ック）な素敵お嬢様のお考えを理解するのに時間がかかつた次第で

！－理解が出来た今は【進化系操縦】とは常連様にも新規のお客様にも楽しんでいただける素晴らしい戦略！－また来たい！－つて思わざるをえない改良の余地がない完璧な戦略だと思います！－はい－！

「…………」

「…………」

うわあ～無言だ！！

ダメ？もお鎮まらない感じですか！？

お願い、許して、神様！！

お願いします！－届けこの想ひ！－ヘブンまでフライアウエイ－！－

「……まあ、いいでしょ。わかってくれればいいんですよ。確かに、ゆずちゃんは天才と言つて過言ではないですからね。理解するのに時間がかかるのは当然ですね～ハハハ」

「（届いたあ～神様ありがと～）アッハハハハハハハ
(泣)」

「はい、それじゃ理解したところで…いけますか？」

「もちろんです！－レベツカ！プルションコ！－と叫びたい！－と俺の魂が熱く燃え多義つております！－はい－！」

「よく言つた！小塚君！それじゃついて来てください！－いきますよ～！？」

『レベツカ！プルションコ！－』

ええい！－考えるな！－感じう！－テンションに流されるのも悪くない！－

「レベッカ！ プルシェンコー！」

「違つて……もつと熱く……」

「レヴェッカアア～！ プルシェンクオオオオ～！」

「いいよー！凄くいいよー！もつとー！もつと頂戴ー！」

「レヴェッカアーン！ プリュッセルツオオー！」

「はい！ オッケー！！ いただきましたああ！！ はい、じゃ！」のま
ま次いつてみよおーーー申し訳！」わこませんの【進化系挨拶】ーーー

『ちよつとおー』「飯作つてゐる最中だつてばあーダメ テザートは
最後のお楽しみつ だぞおー?』

『ノルマニ』のめぐらし

「はい！ 小塙君！ 言つて！！！」

「ちよっとお~ご飯作ってる最中だつてほあ~ダメ テサートほ
最後のお楽しみつ だぞお~? へへシ、ごめんごめん」

「はい！お父さん的にも、『ればば』かと思うから一発オッケー！それより娘がどこのこんな言葉を覚えたか不安で夜も眠れません！」

「理不尽だ！！自分で否定するぶんには怒らないすか！！星野店長！…さつき俺が感じた恐怖はなんだつたんすか！！」

「はい！…次ラストいきま～す！！」

「店長このやう……聞こえてるだる……」

「ラスト……ありがとうございました！またお越し下さいませ！
！の【進化系挨拶】いくよ～」

『バカ野郎！！立ち止まるな！！何の為にここまで来たんだ！！振
り向くな！！行けえええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ガハッ！！！！ツ…どうやら、ここまでらしいな…敵を裏切り…仲間
を裏切り生き抜いてきた…そんな俺が誰かの為に死ねるとはな…ク
クク…クハハハハハハ…いいぜ…最高だ…！てめえら…！俺の
最後の死に戦だ…！とことん付き合つてもらひつぜえ…！（こんな俺
を仲間と呼んでくれてありがとよ…守れよ…世界も…アイツも…）』

』

「ハイツ…！…小塚君…ラストだよ…！…びしつと決めよつ…！」

「バカ野郎…！…立ち止まるな…！…何の為にここまで来たんだ…！…振
り向くな…！…行けえええ…！…！！…！！…！！…！！…！！…！！…
ガハッ…！！…ツ…どうやら俺は…！…長ええわボケエ…！！…

ハアハア…ハアハア…

「はあ…い…終了…！…いやあ小塚君…君、見所あるよ…最後は疲
れちゃつたみたいだけど他は完璧…！…これならすぐにでもお店でれ
るよ…！」

「ハアハア……ほ、本当ですか？ありがとうございます。」

「……疲れたあ

こんなに大声で叫んだのは何年ぶりだ？工場に勤めてからは叫ぶ事は無かつたし、叫んでる内容は意味わからんけど…

まあ…なんか…

「スッキリしたかい？」

「え？」

「大声だしてスッキリしたかい？小塚君…君、自分では気づいていなかつたと思うけど、凄く思い詰めた顔をしてたんだよ？」

「俺が…思い詰めた顔を？」

「うん、見ていて心配になるくらいの…ね。でも今は疲れてはいるけど、いい顔してる。」

「ハハッ…そんなに酷い顔してましたか？でも確かに…いきなり職を失つて、自由を楽しんでたと思ってたのに、実は現実から逃げてただけだったのかもしれません。悩む心を見てみぬふりして、心を助けようとしなかった…本当は不安で…不安で仕方なかつたのかもしませんね。」

「小塚君？僕はうまく励ましたり、良い言葉をかけたりはできないけど…大丈夫！…明るく、楽しく、元気よく…これからはきっとうまくいくよ～…楽にいじりじゃないか」

「ハハハ… 星野店長は前向きですねえ。そうですね、今さら考えて
も仕方ないですし、それに仕事も決まりたし… うん、大丈夫です！
これから頑張つていきますよ～！～！」

ピンポーン ピンポーン

「おや？ お客様のようだね～ どうだい 小塚君、 こままレジの練
習をしてみないかい？ それに挨拶練習の成果のみせびじるだよ？」

「 わうですね～ レジも基本ですし、 早く覚えたいです～～！」

「 ょし～～ それじゃあ～ 初接客いつてみよ～～ 小塚君～～ 挨拶は
？」

「 大きな声で～～」

「 オッケー～～ あいいくよ～～？」

そうして俺は

星野商店の一員としての一歩を踏み出した。

「 レヴェッカアア～～ プルシェンクオオオ～～～」

『 こりつしゃいませええ～』

「 ……（小塚）」
「 ……（店長）」
「 ……（お客様）」

「あつ、お客さん驚かせてすいません!この子、今日入つたばかりの新人なもので、申し訳ございません。」

第2話（後書き）

最後まで読んでくれた貴方
そう！アナタ
もしかして：
ドMかしら？

こんな駄作を読みきるなんて…
なかなかハードなドMね
氣があいそうだわあん

第3話（前書き）

ねまつ ともえですーー！

先日の早朝、コンビニで「夕飯用」のお弁当を貰った時に

「うちのね弁当暖めますー！」と店員さんに言われ

「え？ ああ…はい。」と夕飯用のお弁当がレンジの中を回転する様を眺め続けた…【猫間三礼】です！

感想＆評価＆苦情＆暴言（えｗ）をいただけると嬉しいんですね！

だつてドミですからーー！

あつ、勘違いしないでよねーーべ、別にドミだつて嫌いじゃないんだからーーー

では、こんな感じで始まり始まり

第3話

「（満面の笑みで） ありがとうございました。また、お越しくだ

れこませり…………スッ（無表情に戻る）」

「（眩しそうな満面の笑みで） いらっしゃいませえ～……ス

ッ（無表情に戻る）」

「あ、あの～ゆずりやん？ その最後の「…スッ」って無表情に戻るのは…いったい？」

「…………削減」

「…え？ 削減？ 何を？ 無表情で何を削減してるので？」

「…………笑顔」

「笑顔つー？ 笑顔の削減ー？ 何故につー？」

「………… H P ブーム」

「H P ブーム！？いやいやいや、確かに、この不況でH Pとか節約とか流行ってるけど、笑顔は削減しなくていいんじゃないかな！？いや、むしろこんな世の中だから笑顔が必要なんじゃない！？出して！？～もつと笑顔出してこう！？」

「…………」

「感情電源OFF！？ゆずちゃん！？ゆずちゃん！？せめて電源いれとこう！？その、使ってない時はコンセントを抜いてます。的な顔は見てられない！」

第3話

「看板娘は着脱可能？鉄仮面は今日も笑う

「はい、100円のお返しになります。ありがとうございます」とおまじたーー！」

目の前のお客さんにて、お釣りの小銭を渡し、大きな声で【普通の】挨拶をする。

「うん！だいぶ慣れてきたみたいだね、小塚君！」

「はい、ありがとうございますー。レジって思つたより簡単なんですね。」

「そりだね～焦らすに落ち着いてやれば何も難しい事は無いよ～それより、【進化系挨拶】を…」

「しませんー言こませんー言こたくあつませんー…」

「え～あの頃の小塚君、輝いてたのに～」

俺は店長の言葉を遮るよひひとと全力で宣誓した。
誰がするか…

一度とあんな恥ずかしい思いはしたくない、とか…

「星野店長も言つてないじゃないですか、俺に言わせる前に自分で
言つてくださいよ【レベッカ！フルショーン】って」

ちなみに【レベッカ！フルショーン】とは、他店との生存競争
を生き残る為の戦略として店長血縁の娘、ゆずりやんが考え出した
【進化系挨拶】である。

レベッカ！フルショーン…は、こうつしゃこませーーの進化系挨拶で、他にも申し訳あつませんなどの進化系挨拶が存在するが、長くなるので紹介するのはやめておいた。

「えっ？僕は言わないよ？だって恥ずかしいからね～。あんな挨拶をお姉さんの前で言うなんて～ハハツ、小塚君、それは冗談かい？」

「なるほど、なるほど…喧嘩売つてるな～店長のやつ…」

よおしその喧嘩買つた！－表でろ－！」

「せつかく、ゆずちゃんが考えてくれたのに誰も使ってくれないから小塚君に使つてもらおうと思つたんだけどな。ん？もうすぐお昼じゃないか、混み始める前に休憩行っておいで。あつ店から飲み物持つていつていいよ、おいつてあげる～」

「話聞けよ！てかつ…急に優しくしないでしださこよ！この振り上げた拳と怒りはどこに向かえばいいんですか！？」

「あはは、とりあえず飲み物持つて休憩所向かえばいいと思つよ～？」

「微妙につまいこと言われた！？」

まあ、休憩もらえるのはありがたいな、進化系挨拶の練習からの流れでレジ練習したから正直疲れたし。

「はあ…それじゃ、休憩はいらせてもらいます

俺はモヤモヤした気持ちを感じたまま事務所に向かった。店の奥にある事務所はかなり広く、そのほとんどが在庫商品を置く為の倉庫として利用されていて、テーブルと椅子がある事務所は休憩所としても使われている。

「……つふい～！－はあ、疲れたー」

事務所にある椅子に腰掛けペットボトルに入ったお茶を一気に半分ほど飲み干した後、背もたれにだらしなく寄りかかる。

「作業としては大変な事なんてないんだけどまあ慣れるまでは仕方ないか。」

やはり初めてやる仕事を大変だなあーと思いつつ、暫く座りながらぼけ～つとしていると、不意に奥に積まれた段ボールの間から、キイー…ツバタン…！とドアを開け閉めする音が聞こえてきた。

どうやら、積み上げられた商品で隠れていたが、この部屋には裏口があるらしい。

予期せぬ物音に多少ドキドキしながらも、物音をした方向に目を向けると。

「…………帰宅…………配達終わり」

小さな、静かな声と共に1人の少女があらわれた。

肩まで伸びた綺麗な黒髪。白く透き通るような肌。淡く薄ピンクの唇。

つぶらな瞳と合わせり、綺麗と言つよつは可愛らしい印象の彼女は、つまり…

美少女である。

もう一度言おう。

田の前に【美少女】が現れた

すまん、もう一度だけ言わせてくれ。

田の前に【美少女】があらわる

「…………誰？」

いきなり現れた美少女を見てテンションをたぎらせつづった俺と

田があつた美少女が、凄く…凄く不性感溢れる顔と声で訊ねてくる。

「…………不審者」

「え、いや違つてあのつ、今日からここで働かせてもらひたいとなつた、小塚です」

危うく不審者として確固たる地位を築きやうになつたので、慌てて訂正する。

と、その時、店長がやつてきた。

「あ～ゆずりやん～おかえり～配達～話題をめ～…どう～サト婆は元気だつた～？」

どつやら田の前の「」の子が蹲のゆずりやんじこ。

ずいぶん小さいが、俺が175cmだから…ゆずりやんは145cmつてとこか？

想像より、だいぶ幼い感じだな。

「…………後20年は固い」

ゆずりやんは、親指をビシッ…と立て、無表情ながら、どこか満足そうな雰囲気で答える。

「そりゃ、なら安心だね～サト婆が腰を痛めたって聞いて心配だつたけど～良かった良かった あつ、そりそり！紹介がまだだつたね～」ちから今日から働いてもうつ事になつた小塚君だよ～

店長から紹介され、改めて自己紹介をする。

「えつと、小塚義人18才です！接客業は初めてなので迷惑かけるかもしぬませんが、よろしくお願ひします！」（ニロッ）」

ゆずちゃんは年下だが、接客業に關しては先輩だ。

迷惑かけたり、教わる事は沢山あるだろう。

俺は出来るだけ爽やかかつ、にこやかに挨拶をした。

「……………ゆず」

のにもかかわらず、ゆずちゃんの反応はめっちゃドライだった。お兄さんちょっと傷ついたやつだぞ

やはり、初対面の時にギラついた欲望まみれの目で凝視したのがいけなかつたのだろうか…否つ！あれば仕方ない！目の前の美少女に心をときらせないのは逆に失礼だつ…！

むしろ、異性に対しそんな不埒な感情をもたせてしまつほど美少女な、ゆずちゃんがいけないんではないのだろうか？そうです、いけないんです！

ああ…ゆずちゃん…君は罪な女…いや罪な美少女だ…

と、自分の持つ最高かつ全力の爽やか挨拶が、なんの効力も發揮しなかつた事に半ば絶望しながら現実から目を背けていの俺に、見かねた店長が声をかけてくる。

「あ～ゆずちゃんは恥ずかしがり屋さんだからね～初対面の人にはこんな感じなんだよ～。でも、大丈夫！慣れれば、その素敵スマイルを遺憾なく發揮してくれるよ～、もお本当にゆずちゃんの笑顔は可愛いんだよ～？想像して～る？あのつぶらな瞳！笑った時に見える可愛らしい八重歯　ああ～ゆずちゃん！可愛い！可愛いよ～！

！もお今日から世界3大美女を追い抜いて、世界1大美女ゆずちゃんとして君臨できちやうよお～！！クレオパトラも今頃、嫉妬の涙でエジプト辺りを潤してゐよ～～？」

うるせえ！！

てか、短いフォローだなー中盤以降はただの親バカだし、後半にいたつては何が言いたいのか意味わからないし…

ほら、ゆずちゃん見て？完全にドン引き…いや、完全に心閉ざしちゃつてゐよ～？

「店長？星野店長…？とつあえず、落ち着きまじゅう？ねつ？はい、深呼吸～。大丈夫、怖くない、怖くない…」

「…はあはあ…す～は～…ふつ～いやあ「ぬべ」「ぬん…ゆずちゃんの事になると、つい熱くなっちゃつて…」

「いやまあ、いいですけど…それよつ

ずっと放置してたから、怒つてるかもしれないと思つチラリとゆずちゃんを見る。話の輪に入れなくてきっと寂しい思いをしてゐるはずだ。

ゆずちゃん！寂しい思いをわせで！」めんね？

そあ、義人お兄さんとこっぽいお話ししようじやないか！？

「…………

あつ、全然平氣だ。

怒つてゐるどいつもか、なんの感情すら見えてこないや…

「…………お店…行つてこい？」

もはや挨拶はすんだ。と同時に事務所を出でてから、ゆずちゃん。

そんな冷めた態度の彼女を見て、ふいに気になる事を思って出した。

「あつ、ゆずちゃん？ あのね、わたくしがお店に電話した時に、電話でたのつてゆずちゃん何だよね？」

記憶に間違いがなければ、店長もやつれてたし。

「…………（ムクン）」

ゆずちゃんは店でこいつを止め、相変わらずの無表情で小さく頷いた。

やはり、電話の相手はゆずちゃんで合つてるらしい。

おかしい、明らかにおかしい。

俺が携帯越しに聞いた声は、日だまりのように暖かく澄んだ優しくも元気のある声だったはず。

失礼だけど、田の前の無機質で機械的な声を発する彼女とは似ても似つかない。

「そうなんだ…いや、ほらなんて言つた、女の子って電話だと声高くなつたりするよね？だから、その、ちょっと印象と違うなあって、もう少し朗らかな人なのかなあって、でも、実際会つてみたら機械的と言つたクールつて言つた…あれ？星野店長？どうしたんですか？そんな【これ以上、余計な口をきいたら、生きたまま電子レンジに詰め込んで加熱してやる】みたいなオーラをだしちゃって…いやいや、責めてる訳じゃないんですよ…？ただ、電話越しに可愛い

なあとか、仲良くしたいなあとか、俺的にドストライクの声だなあとか、あれ俺、何言つてんだろ？いやもお本当、つまり星野店長の言つとおり、ゆずちゃん可愛いっ！！最高…パーカー！…ビューティーフォー…」めんなさい…

ダメだ！なんかいろいろとすいませんでした！

だって、会話の途中から店長がなにやら物騒な雰囲気をかもしだしまして…はい…！

とても怖かっただええす。

「あはは～小塚君何を怯えてるんだい つまり、ゆずちゃんの印象が違うつて言いたいんだよね～？ん～小塚君はまだわかつてないな～まあ、見た方が早いかな～ゆずちゃん ちょっとレジ対応の仕方を見せてくれるかな？」

俺が自らの不用意な発言によって、店長からの殺氣を一身に浴び完全に混乱している間も、一切の感情を見せなかつた、ゆずちゃんに店長が声をかける。

ゆずちゃんは軽く頷いた後…

「こりつしゃいませつ～お会計1200円になります。はい、1500円お預かり致します、少々お待ちくださいませ…はい、お返しが300円になります。お確かめ下さいます。ありがとうございます。ありがとうございます～！また、お越しくださいませ～！キラッ～ キラッ～！？

完璧だ！完璧な接客だ！

動作、言葉遣い…

そして何より笑顔…！

つぶらな瞳をと細め、一回りと笑つた口元から覗く可愛いらしい八重

歯、その姿は、先ほどまでの機械的な彼女とは違い、その…とても可愛らしい／＼

不覚にも、見惚れてしまつほぢだ…

「はい…いたきました…いいよ～ゆずちゃん…今日も可愛
いよ～あ～もお～見てた!? 小塚君見てたかい? 最高だよね～?
笑顔が力強いよね～? この笑顔があれば、クレーマーが來ても!
ツンデlena妹が來てもお～腹ペコ騎士王が來ても～!! 絶対負けな
いよねえ～!!」

「…………スツ（無表情化）」

「いや意味わかんないですよ! 特に後半が! 確かにめっちゃ可愛い
です! それは認めますけど、なんですかこの変わりよはは～? 見て
ください! ゆずちゃんまた戻っちゃいましたよ～?」

「ゆずちゃんはね～接客のプロなんだよ～プロフロッショナル 私
生活と仕事の区別をしつかりつけられるなんて普通の16歳には、な
かなか出来ないよ～流石ゆずちゃん!! ゆずちゃん流石～ fu～
fu～fu～!! ゆずちゃんフウ～!!」

「ああ～うるせえ～星野店長～ゆずちゃんの事になるとダメダメで
すね～主に親としてダメダメですよね～?」

「…………仕事は…必ず完遂する…（ビシッ…）」

何故か満足げにサムズアップするゆずちゃん。

「こやこや、ゆずちゃん? こよ? 確かにそれでいいんだけど、も

「ううしー! 何と重つか普段から……ああ…へやつ…可愛こないのや
わつー! 何でそんなに満足そつなんだよー!」

れれややあれぬ胸をほり、ちよこと親指を立てた姿はまるで「ゆず
ちゃんー! ジツチー! ヒツチー! 向いてーへイーへイー!」だから、うるせ
えなこの人ー

「いいよー! ……やう! ナイスポージング! 世界親指コンテストN.O.
1は間違いなじよー! ……はー! ……今日もいただきましたー! 次い
そのまが、片足前に出しつゝ前傾姿勢へ膝の上に両手! はー! …
だつむーのつ」

「おこじー! 娘に向やらせてんだ! しかもポーズ古いわ! そして、
どこから持つてきたその一眼レフ! 本格的なバカ親め! 後で一枚
売つてくださいませ! 店長様! ! ……じゃない! てか、そんな事ゆず
ちやんがするわけないでしょ! ……」

サツー・ビシッ・キコシ! —

「…………キリッ! —」

「ああちやあん! ? 何してん! ? やるの? やつちやつの! ? てか、
だつむーのやり慣れてるな! ! こんな完璧かつ無駄のないだつち
ゅーのつ初めて見たわ! ! こよー! ! わのまがー! ジツチー! も視線く
ださい! ! !」

「小塚でめえー! ウチの娘を写メで撮りつとしゃがったな……?」

「ヒハイー! すいません! 星野店長! ここ出来心で! すいません! —
めんなれー! 許し! …」

「そんなチャチなカメラで撮つてんじゃねえよ！これ使え！墓場でヌード撮つちまうくれえブツ飛んだ写真家も使つてるカメラだ！！さあー収めろーーゆずちゃんの魅力を遺憾なくレンズにおさめやがれーそして後でくれー！」

「…星野…店長…ありがとうございます！まかせて下さい…中学時代、数々のアイドル写真集を読み漁り【淫書黙読】通称（淫デックス）の異名をとった私、小塚義人が、ゆずちゃんの魅力をワールドワイドにお伝え致しますーー！」

「頼もしい～ね～小塚くううううん！！さあーゆずちゃん～もつともつといつぱいちょうどいいーー！」

「……………」

「素晴らしい！小塚義人！脱二一トをして良かつたと心の底から思います！ありがとうーゆずちゃん！ありがとうー！」

カシャッ！カシャッ！カシャッ！カシャッ！

「あ～も～ ゆずちやあああああんー何でそんなに可愛いの～キレてる！今田はいつも以上にキレてるよ～！小塚君がいるからかな～？同年代の男の子の前だから張りきってるのかな～ー！？だったらお父さん凄く悲しい！でも、残念だけど過去最大級の魅力のかたまりでお父さん複雑だよ～！？」

パシヤー！パシヤー！パシヤパシヤパシヤ！

「……へへつ…………チラッ…………おこにたん／＼ちゅ」

すつじい破壊力きたー！

「「「「あせうさまだえええええすうーーー！」」

バタツッ！

「…………任務完了……報酬3万は確定」

こいつして俺と店長は、ゆずちゃんの魅力にK.Oされた。

2人が立ち直るまでの間、店はゆずちゃんが切り盛りし、後に店長は、時給を上乗せした給料＆撮影代。

俺は、その日の給料＆撮影代を、ゆずちゃんに支払う事になつたんだが……

大丈夫だ……反省も後悔もしていない！安心しろっ！

俺は……俺は……

これから強く生きていけるからーー！

第3話（後書き）

先輩お疲れっした！

今日も凄まじい苦行を乗り越え後書きまでやつて来た皆様に、僕は感動と感謝の気持ちでいっぱいです！

それと、質問なんですが…いつになつたら事務所からぐるんですか？

いつになつたら働くんですか？

作者は何を考えてるんですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4180z/>

こんな感じで 星野商店～時給780円～

2011年12月20日20時55分発行